

## 最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

### 笑顔をつくる介護

寒川町立旭が丘中学校

三年 加藤紫乃

「周りに迷惑がかかるから行きたくない。」五年前、親せきの結婚式の数ヶ月まえから、曾祖父に会うといつもこの言葉を言っていました。なぜなら、当時九十三歳の曾祖父は、緑内障という病気で、両目ともほとんど見えなかったからです。長年住んでいた自宅ではなんとか生活できていましたが、外出することはなくなっていました。その結婚式には、我が家も全員招待されていたので、時間をかけて説得し、車イスで出席することになりました。そしてその日が、私が初めて車イスを体験した日であり、体の不自由な人の生活を色々と感じた日でもありました。

その結婚式の日、会場で会った曾祖父は、初めての場所で様子が全く分からないせいかな、

じっとして静かでした。親せきがあいさつに行くくと、声だけで判断して話していました。その様子を見ていて、目の見えない人にとって、初めての場所は、かなり不安があるということが分かりました。また、いきなり声をかけられるということにも不安を感じることに気がきました。

二つ目は、部屋を移動する時です。父が車イスを押ししていました。案内された通路は車イスでは通れず、父はかなり遠回りをして移動していました。バリアフリーの社会になってきたとは言っても、まだまだ整備されていない所が多いということを感じました。

三つ目は、食事の時です。順番に料理が出てきましたが、曾祖父にとつては、どこに何が置かれているのか分かりません。隣の席の父が、一つずつ前に置き、一つずつ中身を説明していました。その結果、曾祖父は自分で食べることができていました。本当なら食べさせてあげたほうが良いような気がしましたが、曾祖父は何でも自分でやってきた人なので、人に食べさせてもらうより、一人で食事が出来ることがとても嬉しそうでした。それを見て、介護というのは、こちらの都合ではなく、相手の立場になって考えることが大切なことだと思います。

そして帰る時、電車と一緒に乗りました。私は、その時初めて、電車に車イスが乗っているのを見ました。駅員さんが台を準備して乗せてくれて、降りる駅でも駅員さんが待っていてくれました。電車の中に車イスのまま乗れるスペースがあることも、その時初めて気づきました。

別れる時、曾祖父は、

「すまなかつたなあ。ありがとなあ。」

と、何度も何度もお礼を言っていました。出席することをあんなに嫌がっていたのに、私があの日見た中で、誰よりも一番楽しそうでした。その様子を見ていて、お世話していた父も母も嬉しそうでした。そして、その日から半年も経たないうちに、曾祖父は亡くなりました。

あの日の体験で、体の不自由な人が生活するには、色々な人の協力が必要だと実感しました。そして、安心安全に暮らすためには、もっともっと設備などの環境的な充実が必要なのは当然ですが、人の心や思いやりも同じくらいか、それ以上に大切だと感じました。少しでも快適な生活ができるように、環境と人の心の両方がより良い社会になってほしいと願います。

あの日、私は何もできずに、ただ見ているだけでした。そしてあの日以来、体の不自由な人と身近に接する機会はありません。しかし、もし機会があれば、何か自分でもできることを見つけて、行動できる人になりたいです。あの日の曾祖父の笑顔を思い出して、声をかけ、手を差しのべる勇気を持ちたいと思っています。